

資料

高校生の自他への暴力行動に対するレジリエンスと
反すうおよび怒りとの関連シダミチコ*
石田実知子*

目的 本研究は、高校生の自他への暴力行動の予防的介入に関する知見を得ることをねらいとして、自他への暴力行動に対するレジリエンスと反すうおよび怒りとの関連について検討することを目的とした。

方法 高校生1年生～3年生327人に対して無記名自記式質問紙調査を実施した。有効回収数は280票(85.6%)であった。これらのデータに対し、レジリエンスが直接的に暴力行動に影響すると同時に、反すう、怒りを通して自他への暴力行動に影響するとした因果関係モデルを仮定し、そのモデルの適合性と変数間の関連性について構造方程式モデリングを用いて解析した。上記モデルには統制変数として性別・学年を投入した。

結果 仮定した因果モデルのデータへの適合度はCFI=0.980, RMSEA=0.043であった。変数間の関連性に注目すると、レジリエンスと反すうおよび自他への暴力行動間に統計学的に有意な負の関連性が認められた。一方で反すうと怒り、怒りと自他への暴力行動間は統計学的に有意な正の関連性が認められた。本分析モデルにおける暴力行動に対する寄与率は82.9%であった。なお、統制変数のうち性別のみレジリエンスと正の、暴力行動と負の統計学的に有意な関連性が認められた。

結論 構造方程式モデリングを用いた分析の結果、レジリエンスは、反すうを低減させると同時に直接的に自他への暴力行動を低減させることが明らかとなった。また、反すうは怒りを介して自他への暴力行動に強い影響を与えていることが示された。レジリエンスを高めることや、怒りを増強させる反すうを抑制することが予防的介入に有効であることが示唆された。

Key words : レジリエンス, 自傷行為, 暴力行動, 反すう, 怒り

日本公衆衛生雑誌 2020; 67(1): 33-41. doi:10.11236/jph.67.1_33

I 緒 言

青年期中期にあたる高校生の時期は、大人への移行時期であり、小学校や中学校と比較し不快情動やストレス反応が増加することが報告されている¹⁾。また、高校生の時期にあたる15～19歳の死亡原因の内、自殺は男女ともに第1位であり、公衆衛生上の課題となっており、この時期の精神的・情緒的な不安定さとの関連が危惧される。自殺未遂や自殺の最も高い予測因子²⁾の1つであるものに自傷行為が挙げられ、これは激しい怒りなどの不快情動の開放を目的に行われることが示されている³⁾。また自傷行

為は、暴力行動・危険行為的傾向との関連も強く³⁾、暴力行動も自殺との関連が憂慮されている⁴⁾。これらの自傷あるいは暴力行動の背景にある感情の1つに怒りが挙げられる⁵⁾が、これは自己の嫌悪的な事柄を何度もネガティブな反すう(以下ネガティブな反すう)をすることにより増強することが示されており⁶⁾、青年期特有の自己に対する過剰な注目との関連も影響しているのではないかと思われる。そしてネガティブな反すうは、抑制のコントロールの低下および問題解決能力の低下にも関連していることが示され⁷⁾、自傷行為や暴力行動との関連も推察される。加えて高校生の激しい怒りに対する対処行動における縦断調査では、1年次に自傷行為・他者への暴力行動(以下自他への暴力行動)による対処行動をとっている者は、学年を経る毎に自他への暴力行動の減少率は低くなることが報告さ

* 川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科
責任著者連絡先: 〒701-0192 倉敷市松島288
川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科
石田実知子

れ⁸⁾、早急な取り組みが求められる。しかしながら、これらの生徒は援助希求能力が乏しいことや、周囲が不調に気づかず援助に繋がらないことが指摘されている⁹⁾。これらのことをかんがみると、高校生に対し、自殺予防という観点も含め、自他への暴力行動に着目し学校教育の中で自他への暴力行動の予防に向けて取り組む必要があるといえる。

これまで自傷行為や暴力行動の予防に向けた研究の大部分は、危険因子に焦点を当てられていたが、近年防御因子であるレジリエンスへとパラダイムシフトが起きてきている。レジリエンスは、ストレスへの抵抗力を表す「回復力」「復元力」あるいは「弾力性」ともいわれ、自尊感情と高い関連があること⁹⁾が示されている。Wernerらは長期の縦断調査を行い、精神保健上のリスク要因を持っていた子供について思春期に一旦深刻な精神保健上の問題がみられたにもかかわらず、成人期では社会適応していることを明らかにしている¹⁰⁾。またレジリエンスは、対象の状況に応じた介入によって促進でき¹¹⁾、精神的健康を促進すること¹²⁾、自殺の防御要因となること¹³⁾、自傷行為や暴力行動を低減させること¹⁴⁾が示されている。このためレジリエンス向上を目指した支援が、自他への暴力行動あるいは自殺予防に対し効果をもたらす可能性が窺える。しかしながら、我が国において高校生を対象とした自他への暴力行動に対するレジリエンスの緩衝効果に関する報告はいまだされていない。

そのため本研究では、自他への暴力行動の予防的介入に関する知見を得ることをねらいとして、自他への暴力行動に対するレジリエンスとネガティブな反すうおよび怒りとの関連について検討することを目的とした。

II 研究方法

1. 概念枠組み

レジリエンスは自尊感情と関連が高く⁹⁾、自尊感情は直接的に適応や発達結果に影響を及ぼし、精神障害、薬物使用、非行の抑止効果を持つこと¹⁵⁾、自尊感情が低下するとネガティブな反すう傾向が引き起こされやすいとされ、ネガティブな反すうとの関連が示されている¹⁶⁾。以上の先行研究を基に、レジリエンスはネガティブな反すうを抑制するとともに自他への暴力行動も抑制することが推察される。そこでレジリエンスがネガティブな反すう、ならびに自他への暴力行動に直接的に影響を与え、ネガティブな反すうは怒りに、怒りは自他への暴力行動に影響を与えるとする因果関係モデルを仮定した(図1)。

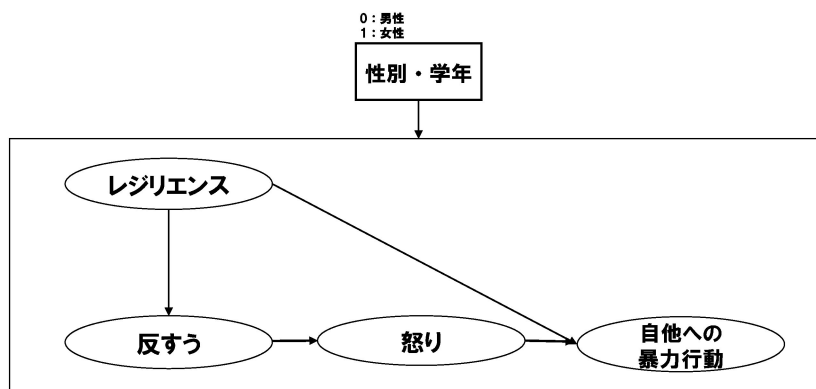
2. 調査対象および調査方法

本研究の調査の抽出法は、自他への暴力行動を扱うため調査時および調査後の生徒の心身の安全への十分な配慮が必要であるため、機縁法を採用した。その結果、調査協力の得られたA県の市街地に位置する普通科高等学校1校に通学する1年生～3年生327人を対象に平成29年5月上旬から6月下旬に無記名自記式質問紙調査を実施した。性別の内訳は男性206人、女性121人であった。学年の内訳は1年生109人、2年生101人、3年生117人であった。対象者には、高校教員の担当する教科あるいはホームルームの時間を利用して口頭および文書にて研究趣旨、調査内容、倫理的配慮について説明後調査を実施し、回収箱にて回収した。回答数は316人(回収率96.6%)、有効回答数280人(有効回答率85.6%)であった。

3. 調査内容

調査内容は、基本属性(性別、学年)、①レジリエンス、②ネガティブな反すう、③怒り、④自他へ

図1 高校生におけるレジリエンス、反すう、怒り、自他への暴力行動の因果関係モデル



の暴力行動で構成した。①レジリエンスの測定にはレジリエンス尺度¹²⁾を用いた。この尺度は「関係構築力」,「克服力」,「突破力」の3因子9項目で評価する5件法のリッカート尺度である。合計点が高いほど、レジリエンスが高いことを表している。Cronbachの信頼性係数(以下 α 係数と表記)は0.863であった。②ネガティブな反すうの測定にはネガティブな反すう尺度¹⁷⁾を用いた。この尺度は「ネガティブな反すう傾向」,「ネガティブな反すうのコントロール」の2因子14項目で構成されている6件法リッカート尺度であり、本研究ではネガティブな反すうの持続傾向を測定する“ネガティブな反すう傾向”のみを使用した。合計点が高いほど、「ネガティブな反すう傾向」が強いことを表している。 α 係数は0.867であった。③怒りの測定には、日本語版 POMS 短縮版¹⁸⁾を用いた。POMSは、置かれた条件で変化する一時的な気分・感情の測定が可能である。緊張-不安,抑うつ-落ち込み,怒り-敵意,活気,疲労,混乱の6下位尺度30項目で構成されている6件法リッカート尺度である。本研究では怒り-敵意のみを使用した。合計得点が高いほど、怒り-敵意が強いことを表している。 α 係数は0.848であった。④自他への暴力行動の測定には、思春期用自他への暴力行動尺度¹⁹⁾を用いた。この尺度は「自傷行動」,「他害行動」の2因子各4項目で評価する5件法のリッカート尺度である。合計点が高いほど、自他への暴力行動が強いことを表している。 α 係数は0.882であった。なお、モデルにはバイアスとなる可能性の高い変数である基本属性の影響を分離することを目的に、回答者の性(男性=0,女性=1)と学年(1年生=1,2年生=2,3年生=3)を統制変数²⁰⁾として分析モデルに投入した。

4. 分析方法

レジリエンス,ネガティブな反すう,怒り,自他への暴力行動の因果関係モデル(図1)を仮定し,そのデータに対する適合性と変数間の関連性を構造方程式モデリングで検討した。因果関係モデルのデータに対する適合性の判定には,適合度指標である Comparative Fit Index (CFI)と Root Mean Squares Error of Approximation (RMSEA)を採用し,パラメータの推定には順序尺度の推定法である重み付け最小二乗法の拡張法 Weighted Least Squares Mean and Variance adjusted (WLSMV)を用い,推定されたパス係数の有意性は有意水準5%を統計学的に有意と判断した。一般的にCFIは0.90以上1に近いほど, RMSEAは0.05よりも小さければ,仮説モデルは妥当であると判断されている²¹⁾。統計解析はMplus 7.2を使用した。

5. 倫理的配慮

調査実施にあたり,保護者に研究の趣旨・内容および保護者の自由意思により参加・不参加を決定でき,参加しない場合でも何ら不利益も生じない旨についてクラス担任を通して説明した。また,同時に研究者および研究協力者である学校長の氏名および連絡先を記した研究説明書を事前に配布した。調査時には,対象者に研究目的,内容,手順,利益,不利益,匿名性について質問紙に明記し,実施時には口頭でもわかりやすく説明した上で,調査紙に対象者からの同意欄を設けることで同意を得た。調査票は無記名とし,調査回答への強制とならないよう調査票の未提出あるいは白紙での回答が可能であること,回答したくない質問項目には回答しなくて良いこと,途中中断が可能であることを強調し,教員は生徒がアンケート調査を行っている間,目立たない場所にいるようにした。そして,教員の目につかない場所に回収ボックスを設置し,生徒自身によってのり付き封筒を厳封した後,生徒自身により投入された。なお,調査にあたり保護者や対象者から問い合わせ等はなく,調査時および調査後,心身の不調を訴える者はいなかった。なお,本研究計画は,岡山県立大学倫理委員会(受付番号16-54,2017年9月28日承認)および川崎医療福祉大学倫理委員会の承認(受付番号17-101,2018年2月5日承認)を得て実施したものである。

III 研究結果

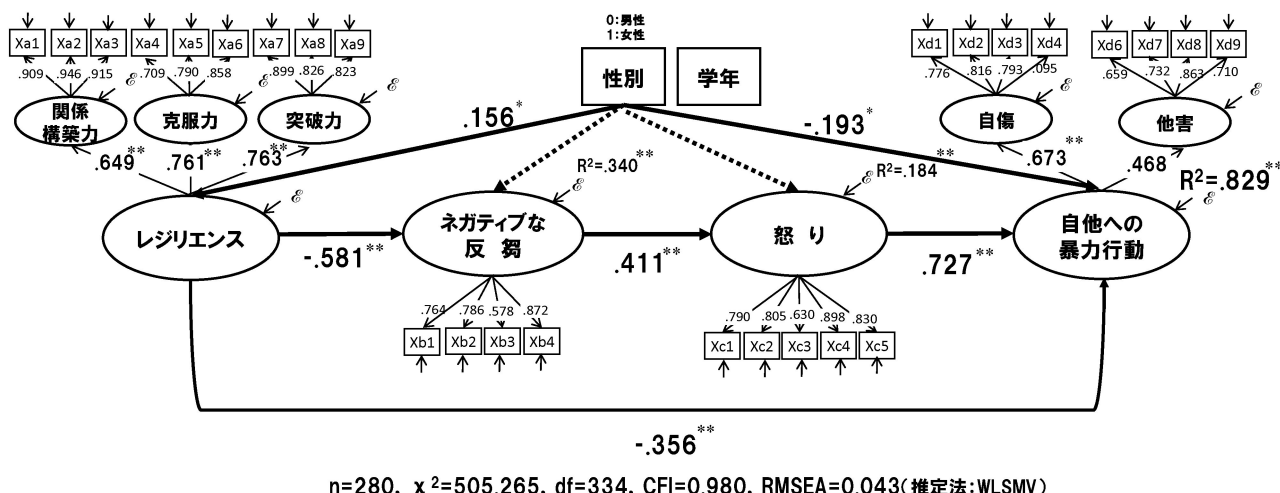
1. 対象の属性

対象の性別は,男性が176人(62.9%),女性が104人(37.1%)であり,1年生88人(31.4%),2年生87人(31.1%),3年生105人(37.5%)であった。

2. 自他への暴力行動に対するレジリエンスとネガティブな反すうおよび怒りとの関連

各尺度の記述統計については,表1~4に示した。レジリエンス尺度,ネガティブな反すう尺度(ネガティブな反すう傾向),POMS(怒り-敵意),自他への暴力行動尺度の4つの尺度を用いてレジリエンスが直接的に自他への暴力行動に影響すると同時に,ネガティブな反すう,怒りを通して自他への暴力行動に影響するとした因果関係モデルを仮定し,そのモデルの適合性と変数間の関連性について構造方程式モデリングを用いて解析した。モデルの妥当性を仮定した因果関係モデルのデータへの適合度指標を確認したところ,CFIは0.980, RMSEAは0.043(図2)であり,統計学的許容水準を満たしていた。また,本分析モデルにおける自他への暴

図2 高校生におけるレジリエンス、ネガティブな反すう、怒り、自他への暴力行動の関連



n=280, $\chi^2=505.265$, df=334, CFI=0.980, RMSEA=0.043(推定法:WLSMV)

※実線は有意な関連性を示し、破線は非有意な関連性を示す。* $P<0.005$ ** $P<0.001$

※図の観測変数名は回答分布に示した項目番号に対応する。

※図の煩雑化を避けるために誤差変数と内生的な潜在変数によって観測される観測変数、統制変数間、潜在変数間および誤差変数間の相関は省略した。

表1 レジリエンスに関する項目の回答分布

N=280 単位：人 (%)

項目番号	項目	回答カテゴリ					平均値	標準偏差
		まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	よくあてはまる		
関係構築力								
Xa1	昔から、人との関係をとるのが上手だ	20(7.1)	52(18.6)	88(31.4)	68(24.3)	52(18.6)	3.29	1.18
Xa2	自分から人と親しくなることが得意だ	27(9.6)	57(20.4)	84(30.0)	56(20.0)	56(20.0)	3.20	1.25
Xa3	交友関係が広く、社交的である	27(9.6)	47(16.8)	87(31.1)	67(23.9)	52(18.6)	3.25	1.22
克服力								
Xa4	つらいことでも我慢できるほうだ	14(5.0)	28(10.0)	75(26.8)	114(40.7)	49(17.5)	3.56	1.05
Xa5	努力することを大事にする方だ	13(4.6)	35(12.5)	87(31.1)	90(32.1)	55(19.6)	3.50	1.08
Xa6	決めたことを最後までやり通すことができる	21(7.5)	43(15.4)	97(34.6)	71(25.4)	48(17.1)	3.29	1.15
突破力								
Xa7	嫌な出来事があったとき、今の経験から得られるものを探す	18(6.4)	54(19.3)	89(31.8)	68(24.3)	51(18.2)	3.29	1.16
Xa8	嫌な出来事があったとき、その問題を解決するために情報を集める	19(6.8)	48(17.1)	77(27.5)	87(31.1)	49(17.5)	3.35	1.16
Xa9	嫌な出来事が、どんな風に自分の気持ちに影響するかを理解している	21(7.5)	37(13.2)	96(34.3)	70(25.0)	56(20.0)	3.37	1.16

力行動に対する寄与率(分析モデルに対し構成要素となるレジリエンス、ネガティブな反すうなどの各潜在変数の変化がどの程度影響を与えているかを示す指標)は82.9%であった。変数間の関連性に注目すると、レジリエンスとネガティブな反すう($\beta = -.581, P<0.001$)および自他への暴力行動($\beta = -.356, P<0.001$)間に統計学的に有意な負の関連性が認められた。一方でネガティブな反すうと怒り($\beta = .411, P<0.001$)、怒りと自他への暴力行動($\beta = .727, P<0.001$)間は統計学的に有意な正の関連

性が認められた。なお、統制変数のうち性別のみ有意な関連性が認められ、男子に比べ女子はレジリエンスと正($\beta = .156, P<0.001$)の、自他への暴力行動と負($\beta = -.193, P<0.001$)の関連性が認められたが、いずれもパス係数は小さかった。

IV 考 察

本研究は、高校生の自他への暴力行動の予防的介入に関する知見を得ることをねらいとして、自他への暴力行動に対するレジリエンスとネガティブな反

表2 ネガティブな反すうに関する項目の回答分布

N=280 単位：人（%）

項目番号	項目	回答カテゴリ						平均値	標準偏差
		あてはまる	ややあてはまる	どちらかというにあてはまる	どちらかというにあてはまらない	あまりあてはまらない	あてはまらない		
Xb1	同じ嫌なことを何度も繰り返して考える傾向がある	46(16.4)	42(15.0)	49(17.5)	74(26.4)	34(12.1)	35(12.5)	3.40	1.59
Xb2	一度嫌なことを考え始めると、そればかりを途切れなく考え続ける方だ	40(14.3)	44(15.7)	65(23.2)	66(23.6)	41(14.6)	24(8.6)	3.34	1.49
Xb3	何日もの間、嫌なことを考えるのに没頭することがある	103(36.8)	51(18.2)	58(20.7)	40(14.3)	13(4.6)	15(5.4)	2.48	1.49
Xb4	嫌なことがあると、そのことが一日の内に何度か頭に浮かぶことがあるが、長い間考え続けることはあまりない*	43(15.4)	38(13.6)	69(24.6)	67(23.9)	41(14.6)	22(7.9)	3.01	1.45
Xb5	しばしば、嫌なことばかりを途切れなく考え続けることがある	60(21.4)	38(13.6)	76(27.1)	66(23.6)	24(8.6)	16(5.7)	3.01	1.45
Xb6	嫌なことばかりを30分以上途切れなく考え続けることがある	102(36.4)	63(22.5)	60(21.4)	28(10.0)	12(4.3)	15(5.4)	2.39	1.44
Xb7	一日中ずっと、嫌なことばかりを考え続けることがある	134(47.9)	50(17.9)	47(16.8)	28(10.0)	12(4.3)	9(3.2)	2.15	1.39

* 逆転項目（処理済）

表3 気分（怒り-敵意）に関する項目の回答分布

N=280 単位：人（%）

項目番号	項目	回答カテゴリ					平均値	標準偏差
		まったくなかった	すこしあった	まあまああった	かなりあった	非常に多くあった		
Xc1	怒る	91(32.5)	87(31.1)	73(26.1)	16(5.7)	13(4.6)	1.19	1.10
Xc2	ふきげんだ	100(35.7)	76(27.1)	70(25.0)	22(7.9)	12(4.3)	1.18	1.13
Xc3	めいわくをかけられて困る	155(55.4)	63(22.5)	38(13.6)	13(4.6)	11(3.9)	0.79	1.09
Xc4	はげしい怒りを感じる	170(60.7)	55(19.6)	27(9.6)	11(3.9)	17(6.1)	0.75	1.16
Xc5	すぐかっとなる	158(56.4)	56(20.0)	37(13.2)	20(7.1)	9(3.2)	0.81	1.11

表4 自他への暴力に関する項目の回答分布

N=280 単位：人（%）

項目番号	項目	回答カテゴリ					平均値	標準偏差	
		しない	めったにしない	時々する	よくする	かなりする			
自傷行動									
Xd1	自分のからだをつねる		93(33.2)	78(27.9)	64(22.9)	18(6.4)	27(9.6)	2.31	1.26
Xd2	自分の髪の毛や皮膚をかきむしる		178(63.6)	62(22.1)	31(11.1)	5(1.8)	4(1.4)	1.55	0.87
Xd3	自分のからだや壁を殴る		209(74.6)	50(17.9)	16(5.7)	3(1.1)	2(0.7)	1.35	0.70
Xd4	自分の皮膚をシャーペンなど尖ったもので刺す		121(43.2)	69(24.6)	46(16.4)	24(8.6)	20(7.1)	2.12	1.26
他害行動									
Xd5	相手をことばでのしり攻撃する		227(81.1)	26(9.3)	16(5.7)	7(2.5)	4(1.4)	1.34	0.81
Xd6	相手に暴力をふるう		206(73.6)	31(11.1)	25(8.9)	11(3.9)	7(2.5)	1.51	0.98
Xd7	他者や公共のものを壊す		203(72.5)	34(12.1)	26(9.3)	12(4.3)	5(1.8)	1.51	0.95
Xd8	相手を無視する		243(86.8)	18(6.4)	10(3.6)	6(2.1)	3(1.1)	1.24	0.72

すうおよび怒りとの関連について検討することを目的とした。

本研究は、統計解析において、構造方程式モデリングを解析手法として用いた。構造方程式モデリングは、仮説として提案した変数間の関係性をモデル化し、その妥当性を適合度指標によって因子構造や因果関係のモデルの適切さを検証とするという点において非常に有用な統計分析ツールである²²⁾。さらに、構成概念間の関係のみに着目するならば、レジリエンスやネガティブな反すうなど構成概念同士の因果関係について、その測定誤差を取り除いた上で真の構成概念間の関係を検証することができる点にある²²⁾。以上のことから、本研究の解析手法として構造方程式モデリングを採用したことは適切であったといえよう。また、本調査では集計データとして280サンプルが確保できた。構造方程式モデルを用いた解析には通常200サンプル程度を満たす必要があるとされている²³⁾が、本調査ではそれを満たすことができたことは評価できると考える。加えて、本分析モデルにおける寄与率は、82.9%で高値であったことから、予測を裏付けるのに十分な影響力が備わっているモデルであると考えられる。以下、本研究で得られた知見について考察する。

変数間の関連性に着目すると、レジリエンスはネガティブな反すうに対して抑制的に作用し、間接的に自他への暴力行動に影響を与えることが明らかとなった。また、同時に直接的に自他への暴力行動に影響を与えることが明らかとなった。一方でレジリエンスからネガティブな反すうへのパス係数は、 -0.581 と抑制的に働いているのに対し、ネガティブな反すうから怒りへのパス係数は 0.411 とネガティブな反すうにより怒りへの影響が高まり、さらに怒りから自他への暴力行動へのパス係数は 0.727 とかなり高くなっており、自他への暴力行動への影響が非常に強くなっていることが示された。このことは、ネガティブな反すうによって怒りが高まると自他への暴力行動という形で行動を起こす傾向が強いことが推察される。先行研究においてもネガティブな反すうは、怒りと攻撃的行動を高め、また維持することを増強させる²⁴⁾ことが示されている。つまり、怒りの原因となった状況のみに起因するのではなく、ネガティブな反すうを介してその出来事や情動を再体験することで、現実ストレスが起きたかのように不適切な確信を強め²⁵⁾、怒りが増幅していると考えられる。そのため、怒りが喚起される出来事を体験した直後のみならず、時間が経過した後も自傷行為や暴力行動を起こす危険性ははらんでいともいえる。自傷行為は、怒りなど強烈な不快感

の解放の目的で行われるが、通常人前で自傷行為が行われることはほとんどなく、自宅で夜間行われるケースが多いとされる²⁶⁾ことから時間においてネガティブな反すうをすることにより、強烈な怒りが喚起され、自傷行為に繋がっていることが推察される。また、ネガティブな反すう傾向が高い者は、報復的な反応を計画する可能性がより高く²⁷⁾、身体的攻撃や言語的攻撃と強い関連性を示す²⁸⁾とされ、本研究結果を裏付けるといえよう。

本研究結果を概観し、高校生の自他への暴力行動に対する予防的介入を考えるならば、レジリエンスを高めることや、怒りを増強させるネガティブな反すうを抑制することが予防的介入に有効であることが示唆された。しかし、ネガティブな反すうを無意識に行っている場合は介入が困難であるが、ネガティブな反すうに気づき意識的にネガティブな反すうをコントロールすることで、ネガティブな反すうを減少させることが可能となると期待される。一方でレジリエンスは、本研究結果においてネガティブな反すうを抑制することや直接的に自他への暴力行動を低減することが実証的に示された。このことから、レジリエンス促進に向けた介入を行っていくことで、自他への暴力行動予防に寄与できる可能性が示された。レジリエンス促進を目的とした介入としては、メタアナリシスにおいて、認知行動療法をベースとしたマインドフルネスと混合介入が有効であることが示されている²⁹⁾。また、マインドフルネス、ネガティブな反すう、怒り・敵意、攻撃性の関連について検討した研究では、ネガティブな反すうの低減効果も示されている⁶⁾。レジリエンス促進に向けた介入は、自傷行為や暴力行動そのものに焦点をあてたものではないため、これらの引き金となった強烈な怒り、不安といった情動²⁾や感覚記憶などのフラッシュバックを伴いにくい。また、自傷行為の他の生徒への伝染性²⁾に対しても特別な配慮が必要ないことから、学校教育の中で集団を対象として安全に実施できるといえよう。さらに、レジリエンス促進に向けた介入は、自傷行為や暴力行動と関連のない生徒についても、思春期特有の心理特性を背景としたストレスから引き起こされるストレス反応に対し、対症療法的な対処ではなく、一次予防的役割を果たすと推察される。日本においては、高校生を対象としたレジリエンス教育は散見されるにとどまっているが、今後教育現場の実情に合わせた実証的根拠に基づく高校生のレジリエンスの育成に向け、健康教育を行っていくことが急がれる。具体的には、本研究で取り上げたレジリエンスの要素となる「関係構築力」、「克服力」、「突破力」の各能力を

高めていくことが望まれる。「関係構築力」向上に向けては、ソーシャルスキル・トレーニングや友人同士によるピア・サポート向上に向けた取り組み、「克服力」向上に向けては生徒個々のストレスに着目した支援が望まれよう³⁰。「突破力」については、嫌な出来事に対して分析し、柔軟に解決に向け切り開いていくために事実に対して与えている意味づけを変え、異なる見方でもとらえ直すなど認知の変容を図ることも有効であると思われる。

最後に本研究の限界として、対象者は限られた地域の普通科1校の生徒のみであり、男女比も異なることから一般化の限界である。加えて、今回の研究で用いられた仮説モデルによる各変数間の関連性の検討は、分析する変数間に統計学的に有意な関連性が見いだせても、異なるサンプルにおいてモデルの再現性の検討はされておらず概念的な側面からも課題が残る。今後対象を拡大した調査を実施することでさらなる追試を行い、詳細に検証を重ねていかなければならないものと思慮する。さらに、本研究は自記式質問紙に基づく調査を行っており、とくに自他への暴力に関しては対象者にとって非常に繊細な内容であり reporting bias が混入した可能性を否定できない。

V 結 語

本研究は、高校生の自他への暴力行動に関する予防的介入に関する知見を得ることをねらいとして、高校生の自他への暴力行動に対するレジリエンスとネガティブな反すうおよび怒りとの関連について構造方程式モデリングを用いて検討した。その結果、レジリエンスは、ネガティブな反すうを低減させると同時に直接的に自他への暴力行動を低減させることが明らかとなった。また、ネガティブな反すうは怒りを介して自他への暴力行動に強い影響を与えていることが示唆された。今後は、実証的根拠に基づいたレジリエンス育成に向け、高校生に対する健康教育を行っていくことが求められる。

本研究は、平成29年度科学研究費補助金基盤研究(C) 科研費番号(17K12579: 研究代表者・石田実知子)の一部として行われたものである。本研究にご協力いただきました高校生・高等学校教職員の皆様に謝意を表したい。また、本論文は、編集委員ならびに2人の匿名の査読者による貴重で適切なお指摘をいただき改稿したものであり、記して感謝申し上げたい。著者らに開示すべきCOI関係にある企業等はない。

(受付 2019.6.6)
(採用 2019.9.9)

文 献

- 1) 小澤永治. 思春期における不快情動への態度とストレスの関連. 心理学研究 2010; 81: 501-509.
- 2) Hawton K, Bergen H, Cooper J, et al. Suicide following self-harm: findings from the multicentre study of self-harm in England, 2000-2012. *Journal of Affective Disorders* 2015; 175: 147-151.
- 3) 松本俊彦. 自傷行為の理解と援助. 東京: 日本評論社. 2009.
- 4) 芹沢俊介. 若者の殺人事件をどう理解するか—アノミーを視点に一. 公衆衛生 2009; 73: 632-635.
- 5) Ishida M, Dei R, Kunikata H, et al. Development of the anger coping behaviors style scale for high school students. *Kawasaki Journal of Medical Welfare* 2017; 23: 1-9.
- 6) Borders A, Earleywine M, Jajodia A. Could mindfulness decrease anger, hostility, and aggression by decreasing rumination? *Aggressive Behavior, Official Journal of the International Society for Research on Aggression* 2010; 36: 28-44.
- 7) Nolen-Hoeksema S, Wisco BE, Lyubomirsky S. Rethinking rumination. *Perspectives on Psychological Science* 2008; 3: 400-424.
- 8) 石田実知子, 井村 亘, 小池康弘, 他. 高校生における怒りに対する対処行動の継時変化—潜在曲線モデルを用いた検討—. *インターナショナル Nursing Care Research*. 2018; 17: 1-9.
- 9) 小塩真司, 中谷素之, 金子一史. ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—. *カウンセリング研究* 2002; 35: 57-65.
- 10) Werner EE. High-risk children in young adulthood: A longitudinal study from birth to 32 years. *American Journal of Orthopsychiatry* 1989; 59: 72-81.
- 11) 高辻千恵. 幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討—. *教育心理学研究* 2002; 50: 427-435.
- 12) 石田実知子, 井村 亘, 渡邊真紀. 高校生のレジリエンスと精神的健康の関連. *学校保健研究* 2017; 59: 333-340.
- 13) 蓮井千恵子, 永田敏明, 北村俊則. レジリエンスと罪責感—希死念慮の予測—. *心理臨床学研究* 2008; 25: 625-635.
- 14) Huang L, Mossige S. Resilience in young people living with violence and self-harm: evidence from a Norwegian national youth survey. *Psychology Research and Behavior Management* 2015; 8: 231-238.
- 15) Masten A S, Best K M, Garmezy N. Resilience and development: contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology* 1990; 2: 425-444.
- 16) 綿谷日香莉, 石津憲一郎. ネガティブな反すうと自尊感情および自尊感情の変動性との関連. *人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究* 2014; 9:

- 125-131.
- 17) 伊藤 拓, 上里一郎. ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討. *カウンセリング研究* 2001; 34: 31-42.
- 18) 横山和仁編著. POMS 短縮版手引きと事例解説. 東京: 金子書房. 2005; 1-10.
- 19) 石田実知子, 江口実希, 國方弘子. 思春期用自他への暴力行動尺度の開発. *社会医学研究* 2018; 35: 13-19.
- 20) 古谷野亘, 永田久雄. 実証研究の手引き—調査と実験の進め方, まとめ方. 東京: ワールドプランニング. 1992.
- 21) 豊田秀樹. 共分散構造分析 Amos 編, 東京: 東京書籍. 2007.
- 22) 今野勝幸. 構造方程式モデリング—モデルの構築と再検討—. 外国語教育メディア学会2012年度報告論集 2012; 68-74.
- 23) 豊田秀樹. 共分散構造分析疑問編. 東京: 朝倉出版. 2011.
- 24) Peled M, Moretti MM. Ruminating on rumination: are rumination on anger and sadness differentially related to aggression and depressed mood? *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment* 2009; 32: 108-117.
- 25) Williams M, Penmam D. Mindfulness: A Practical Guide to Finding Peace in a Frantic World/佐渡充洋, 大野裕監訳. 自分でできるマインドフルネス. 大阪: 創元社. 2016; 15-44.
- 26) 神澤 創, 中田玲奈, 才野雄大. 若年者の自傷行為と精神的健康に関する研究. 帝塚山大学心理学部紀要 2016; 5: 57-63.
- 27) Krahé B. *The Social Psychology of Aggression*. Psychology Press. 2001.(秦 一士, 湯川進太郎(訳). 攻撃の心理学. 京都: 北大路書房. 2005).
- 28) Anestis MD, Anestis JC, Selby EA, et al. Anger rumination across forms of aggression. *Personality and Individual Differences* 2009; 46: 192-196.
- 29) Joyce S, Shand F, Tighe J, et al. Road to resilience: a systematic review and meta-analysis of resilience training programs and interventions. *BMJ Open* 2018; 8: e017858.
- 30) 石田実知子, 井村 亘, 渡邊真紀. 高校生のレジリエンスと精神的健康の関連. *学校保健研究* 2017; 59: 333-340.
-

Correlations among resilience against violent behavior toward the self and others, rumination, and anger in high school students

Michiko ISHIDA*

Key words : resilience, self-harm, violent behavior, ruminations, anger

Objectives Correlations among resilience against violent behavior toward the self and others, ruminations, and anger were examined to obtain data for preventive interventions for violent behavior toward the self and others in high school students.

Methods An anonymous self-report questionnaire was administered to first, second, and third-year high school students ($N=327$). There were 280 valid responses (85.6%). The following causal model was assumed based on the data: Resilience directly affects violent behavior toward the self and others and simultaneously affects violent behavior through rumination and anger. The goodness of fit of the model and correlations among variables were analyzed using structural equation modeling, with gender and school year as control variables.

Results The goodness of fit of the model to the data indicated that the comparative fit index was 0.980 and the root mean square error of approximation was 0.043. Statistically significant negative correlations among the variables were indicated between resilience and rumination and between violent behavior toward the self and others. On the other hand, statistically significant positive correlations were indicated between rumination and anger and between anger and violent behavior toward the self and others. The contribution ratio of the model to violent behavior was 82.9%. Furthermore, gender, which was one of the control variables, had a statistically significant positive correlation with resilience and a negative correlation with violent behavior.

Conclusions Results of structural equation modeling indicated that resilience decreased rumination and directly decreased violent behavior toward the self and others. Moreover, rumination had a strong effect on violent behavior mediated by anger. It is suggested that increasing resilience and suppressing rumination that reinforces anger would effectively prevent violent behavior toward the self and others.

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare